

酪農・豆知識 第 123 号

黒毛和種子牛の哺乳行動 (2)

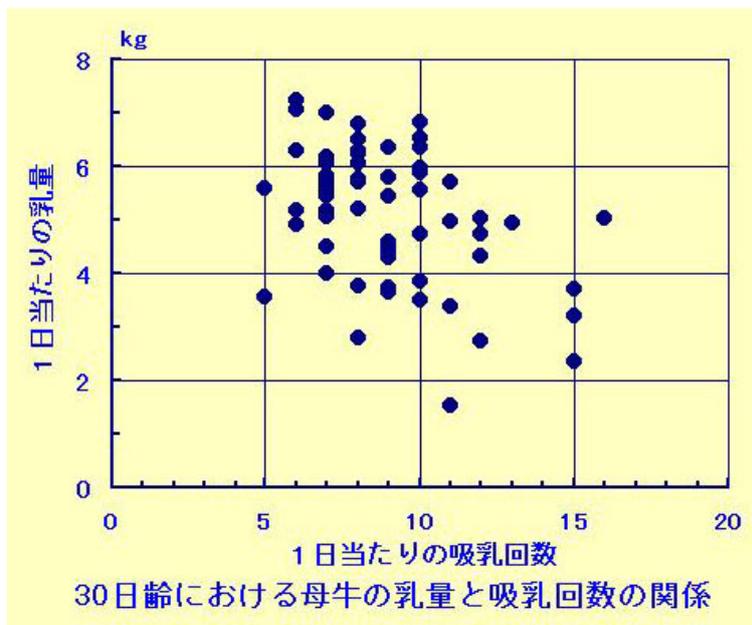
1.はじめに

前号 (第 122 号) において、黒毛和種の哺乳回数や哺乳量の推移について紹介しました。この結果を踏まえて、哺乳量と哺乳回数、発育性との関連性について述べたいと思います。

2.黒毛和種子牛の哺乳量と哺乳回数の関係

図は 30 日齢における哺乳量と哺乳回数の関連を示したものです。哺乳回数は 5 回/日～16 回/日の広い範囲に分布しています。30 日齢の哺乳量とは有意な負の相関関係にあり、哺乳量が多いと哺乳回数は減少します。60 日齢でも同じく有意な負の相関関係にあります。90 日齢以降になると、そのような相関関係は認められませんでした。これは分娩後の経過日数の伴い、母牛の乳量も減少し、子牛も補助飼料の摂食量が増えるために、母乳に対する依存度が低下するためと考えられます。

ヒトでも寝る子は育つと言われていますが、哺乳でお腹が一杯になれば、そうたびたび哺乳することもないのでしょう。一方、お腹が満たされないと、母牛に多頻度で哺乳に向かうことを意味しています。



3.哺乳量と日増体量 (DG) との関係

黒毛和種の哺乳量は、分娩直後が最も多く、その後は漸減していくことを前号で紹介しました。いわゆる、乳牛と異なり泌乳曲線の山がないのが特徴です。図には、出生後からの日増体量 (DG) の推移を示しました。DG は出生後 6 週目ごろまで低下して、その後、漸増する傾向にあります。子牛には代用乳を生後 3 週目頃から、6～9 週目以降からは子牛育成用飼料を給与し、乾草は自由採食させています。

子牛は 6 週齢を過ぎたころから補助飼料も摂取できるようになり、乳量の漸

減を超えた栄養の摂取が可能となることから、D Gも漸増傾向に歎じたものと考えられます。それは泌乳量と哺乳回数の有意な関係が崩れてくることから言えます。

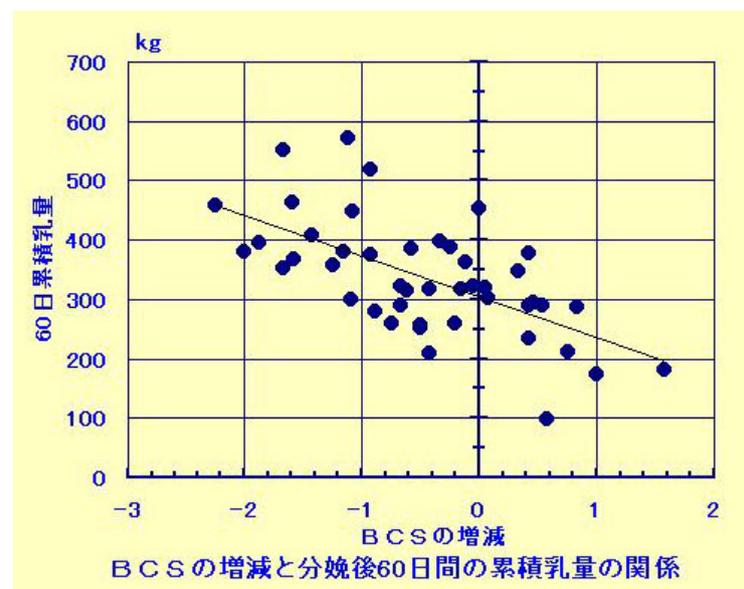
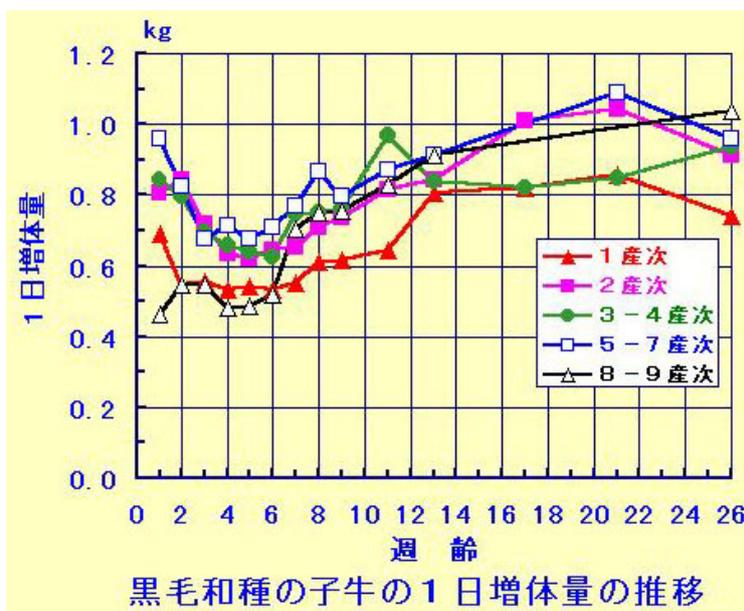
このことを回避するために、早期離乳後の人工哺乳も開発され、子牛の発育改善にも役立っています。しかし、人工哺育は手間暇がかかるものですし、黒毛の乳は市場価値が低いので、自然哺乳させながら子牛の発育改善の開発、特に8週齢位までの新規開発も必要です。

最後の図は、ボデーコンディションスコア（BCS）と累積総乳量との関係を示しました。ここでのBCSは10段階のスコアですので、乳牛で多く使われている5段階とは異なります。これからわかるように、累積乳量が多い母牛ほどBCSは

低下している事を表しています。BCSが低下することは体重の減少も招いています。やはり、黒毛和種でも身を削って乳を生産していることが理解できます。これは乳牛と一緒に、生理的減少以上にBCSを低下させないためには、母牛への増給は必要です。

4. 終わりに

黒毛和種での哺乳の特徴について、理解いただけましたでしょうか。



日産合成工業株式会社 学術・開発部

